

国際理解教育の実践における外部講師の役割

田中 志歩・神高 綾乃・月岡 泰誠・池田 光一・山岸 知幸*
(大学院教育学研究科) (大学院教育学研究科) (大学院教育学研究科) (大学院教育学研究科) (附属教職支援開発センター)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学大学院教育学研究科

*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Focus on Roll of a Guest Teacher of Education for International Understanding Practice

Shiho Tanaka, Ayano Kandaka, Taisei Tsukioka, Kouichi Ikeda and Tomoyuki Yamagishi*

Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 国際理解教育の実践において、外部講師が招待されることは多い。そこでは、講師の体験を中心とした講演になることが多い。本研究では、外部講師に焦点を当て、国際理解教育実践の今後の在り方について検討した。外部講師と外部講師補助者でチームを組み、国際理解教育の授業実践に協力参加しつつ、児童へのアンケート調査と授業協力者の自己評価をもとに、重要となる実践のポイント及び講師の役割と課題について言及した。

キーワード 国際理解教育 外部講師 授業協力者 総合的な学習の時間 地域連携

1. はじめに

グローバル化が進む現代社会において、国際理解教育への期待はより一層高まっている。学校現場では、各学校で工夫した取り組みが企画され、その多くは外部講師との連携による講演会をはじめとした実践である。

第一執筆者は、1年間の長期滞在を含む7年間のバングラデシュとの関わりがあり、これらの経験を学校や市民講座等で、国際理解教育や国際交流等に関する授業や講演として話す機会を2015年から多く積んでいる。しかしこのような経験を積むにしたがって、外部講師は真に学習者の学びに貢献しているのか、言い換えれば、外部講師に求められる真の役割とは何かを明確に示すことが必要であると考えようになった。

本研究は、第一執筆者を含む香川大学大学院教育学研究科1年生(2017年度)の4名の日本人大学院生が、県内の小学校で実際に国際理解教育の実践に協力し、その実践に係る事前・事後・3か月後アンケート、また大学院生それぞれの実践後の自己評価をもとに、国際理解教育の実践のポイント及び外部講師の役割と課題について検討を行った。

具体的には、以下の流れで研究を進めた。

- (1) 香川県内の公立K小学校における授業実践への協力
- (2) 授業実践に係るK小学校での事前・事後・3か月後アンケート調査の検討
- (3) 授業協力者自身の実践を終えての自己評価の検討

2. 国際理解教育実践における外部講師に関する先行研究

国際理解教育を実施するに当たって、学校外との連携・協働が進められ、多くの実践記録が報告されている。開かれた学校づくりが推進され、社会に開かれた教育課程が重視される現在、学校外の外部講師の協力による実践は今後ますます増加していくと考えられる。外部講師に焦点を当てたこれまでの国際理解教育実践の先行研究は、以下のようにまとめられる。

小島・石井（2005）は、小学校第6学年の社会科学の授業の中で、外部講師として授業実践を行った。外部講師はその存在自体の珍しさから児童の興味を引きやすいこと、学級担任と外部講師の連携の重要性、担任教師による授業前後のフォローアップが必要であることが指摘されている。

留学生による国際理解教育の実践としては、植木・高橋（2010）、伊藤（2016）がある。植木・高橋（2010）は、千葉県内の中学校における国際交流ゼミの授業での取り組みを分析している。この授業では、中学生が留学生との交流を半年間で21回行っている。留学生から出身国に関する紹介を受けるだけでなく、中学生が留学生に対して和室でのおもてなしや、日本の年中行事の紹介を行うなどしつつ、自国の文化の学習を深めることも意図して行われている。生徒からの全体のまとめの意見として、留学生との交流が深まるにつれて「○○国人」ではなく、「○○国の□□さん」といった、国際理解のみならず個人に対する理解にもつながることが報告されている。また、伊藤（2016）は、大阪大学国際教育交流センターが実施している、留学生を大学の近隣の学校へ派遣するスクールビジットプログラムを、外部講師として派遣された留学生側から事業評価分析を行っている。外部講師として派遣されている留学生らは、この事業に高い満足度を感じており、また、訪問先の児童生徒に行ったアンケート結果からも、留学生とのコミュニケーションを通じて文化への相互理解と多文化共生が促進されていることが

報告されている。

杉村（2017）は、神奈川県S市において、教員への国際理解教育に関するアンケートを実施している。その中で、「国際理解教育を実施するにあたり必要な資源や情報」をたずねたところ、79人中30人が「人材」をあげたことを明らかにしている。「人材」の内訳としては、①語学力（現地の人材、通訳）、②海外事情の知識、③外国人（地域の外国人、留学生）との交流機会という回答となっており、現場の教員からも学校外との連携・協働が求められていることを示している。

また、外部講師の取り組みではないが、岡本ら（2017）は、JICAボランティア経験者の教員が勤務する愛知県内の公立小学校3校と特別支援学校1校における国際理解教育の実践を行っており、児童らの意識の変容が見られた要因の一つに、実際に海外現場経験のある教員が授業をすることをあげている。

これらの先行研究には、学校や教員が国際理解教育を行う上で、学校外の人材を求める意味、またその必要性が示されていると言える。また、実際に外部講師を招いた実践報告からは、外部講師や国際協力の現場経験のある者が国際理解教育を実施することで児童の興味を引きやすいことが指摘されている。課題としては、一回限りの授業ではなく、継続して国際理解教育を学校の授業内外で実施することの必要性があげられている。

3. 香川県内の公立K小学校における授業協力とアンケート調査

3-1. 授業協力

(1) 実践者

K小学校第5学年学級担任・副担任

香川大学大学院教育学研究科学生4名（外部講師A、外部講師補助者B、C、D）

(2) 対象者

K小学校第5学年35人

(3) 実践内容と方法

2017年11月の総合的な学習の時間に、バングラデシュを題材とする授業を行った。この日のK小学校では、午前に授業参観、午後から文化祭が行われる「〇〇まつり」を実施しており、午前は全学年が地域ボランティア講師による総合的な学習の時間の授業を受けた。第5学年のテーマは国際理解であった。

授業協力を行った大学院生4名は、バングラデシュでの日本語教員歴のある外部講師A、外部講師補助者のB、C、Dである。この4名は、バングラデシュの少数民族衣装を身にまとい参加した。

当日までに、外部講師Aと外部講師補助者Bは小学校を訪問して、担任及び副担任と学級の児童の様子を共通理解し、講義の内容や体験活動の内容等、授業構想について打ち合わせを行った。その後も、連絡を取り合いながら構想を深めた。

授業内容は、合計3時間の授業のうち、1時間目は授業協力者である大学院生講師による座学形態でのパワーポイントを用いた、バングラデシュの国事情、文化、日本との繋がりなどの紹介を行った。2・3時間目は、1クラスを2グループに分けて、学級担任と副担任が、バングラデシュの小学生にプレゼントするためのコマを折り紙で作成する活動、授業協力者が、バングラデシュのフェアトレードでできた布を用いて栞づくりをする活動を行った。児童は、1時間交代で両方の活動を体験した。授業の締めくくりとして、バングラデシュの紅茶レブチャ(レモンティー)を用意し、飲みたい児童が自由に飲めるようにし、あわせて15分の質問の時間を設けた。

なお、折り紙で作ったコマは外部講師A、外部講師補助者Cが2018年3月にバングラデシュを訪れた際に、現地の小学5年生に手渡した。その時の児童の様子を写真とともに、担任、副担任に送付・報告した。

(4) 活動の流れと児童の様子

1) 1時間目の座学での様子

1時間目の座学では、バングラデシュについて、外部講師A、外部講師補助者Cがパワーポイントを用いて紹介した。バングラデシュの位置、バングラデシュ滞在中に外部講師Aが1日に飲んでいた紅茶の量、外部講師Aが勤めていた学校でのテスト勉強法、の3つのクイズを行った。また、JICAボランティアが作成している「わたしのいちにち」という、バングラデシュの小学生の1日を2分程度でまとめた動画を流した。

児童は、バングラデシュの人口密度の高い様子を表した満員電車や、食べ物など日本との文化の違いに驚きの声を上げた。日本とバングラデシュのつながりを知った際には、自分の生活の中でバングラデシュの物があることや、逆にバングラデシュの日常の中で日本の製品が使われていることへ意外性を感じている様子が見受けられた。

特に、児童と同じバングラデシュの小学5年生の1日の生活を紹介した際には、朝4時に起きて勉強をしていることや毎日2食の生活であることを知り驚くとともに、自分の生活と比較して考えようとする児童も見受けられた。

2) 2・3時間目の体験活動

2・3時間目は、児童は2グループに分かれ、栞づくりと折り紙のコマづくりを行った。栞は、外部講師Aが勤めていたバングラデシュの寄宿舎学校で織られている布を使用した。事前に外部講師補助者Bが、均一の大きさに布、厚紙、リボンを切り、日本とバングラデシュの旗のシールを用意した。児童は、自分用とプレゼント用の2つの栞を作った。手順は、厚紙の表面に布を工作用ボンドで貼り付け、裏面に旗シールを貼り、自分の名前やプレゼントしたい人の名前をベンガル語で書き、リボンを通すというものである。

栞づくり、コマづくりともに、作業スピードに個人差があり、早く作業が終了した児童は、絵を描くなどして栞に工夫を凝らしていた。

3) レブチャの試飲と質問コーナー

3時間目のおわりに、レブチャの試飲と質問の時間を設けた。レブチャはバングラデシュで飲まれているものと同等のレシピでいれたため、日本で飲むレモンティーより甘く、児童からは「甘すぎる」「すごい砂糖がたくさん入っているよ」等の声が聞かれた。

質問の時間には、児童たちは積極的に挙手し、多くの質問があった。主なものは、「民族衣装はどうしてそんなにカラフルなのですか?」、「人口が多いと大変なことは何ですか?」、「なんのご飯がおいしかったですか?」であった。

3-2. アンケート調査

事前、事後、3か月後と、児童へ合計3回のアンケートを行った。

(1) 事前アンケートと回答結果

事前アンケートは、実践の5日前に学級担任、副担任が実施した。回答者数はクラス全員の35人である。質問は以下の3問である。

- ①外国に興味・関心がありますか? (ある・ない)
- ②バングラデシュという国について知っていますか? (知っている・名前を聞いたことがある・知らない)
- ③②で「知っている」と答えた人はバングラデシュについてどんなことを知っていますか? (複数回答可)

これらの質問の項目ごとの回答は以下の通りである。

- ①興味・関心がある 25人、興味関心がない 10人
- ②知っている 4人、名前は聞いたことがある 13人、知らない 17人、未記入 1人
- ③賃金が安い、貧困、学校に行けない子がいる、アジアの国、首都はダッカ、暑い、ハイジャック事件があった

事前アンケートの結果から、外国に興味関心のある児童が71.4%と、高い割合を占めていることがわかる。バングラデシュについては、知っている、名前は聞いたことがある児童数が

あわせて17人と約半数であったが、首都がダッカであることやハイジャック事件があったことなど、貧困、暑い、災害が多いなどの一般的に知られていること以外の記述も見られた。

(2) 事後アンケートと回答結果

事後アンケートは、授業終了後に実施した。事後アンケートの回答者数は早退者が2人いたため33人である。質問は以下の4問である。

- ①バングラデシュのどんなことを知りましたか? (複数記述可)
- ②今日の授業の感想
- ③ほかの国についても知りたいですか? (はい・いいえ)
- ④どんな国について、なにを知りたいですか? (複数記述可)

表1: バングラデシュのどんなことを知りましたか (①)

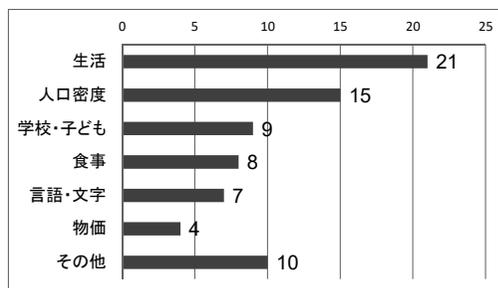
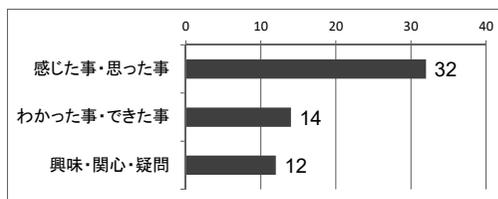


表2: 今日の授業の感想 (3分類) (②)



事後アンケートの結果は、まず、①「バンングラデシュのどんなことを知りましたか？」について、複数記述をした児童が18人、単数記述をした児童が15人であった。内容は、「生活(21人)」、「人口密度(15人)」、「学校・子ども(9人)」、「食事(8人)」、「言語・文字(7人)」、「物価(4人)」、「その他(10人)」であった(表1)。

次に、②「今日の授業の感想」については、講義について書いている児童が22人であり、活動について書いた児童が11人と、講義について書いた児童数が上回っていた。感想の内容を3つの視点でまとめると、まず、「ベンガル語が難しかった。」、「手でカレーを食べているのは

びっくりしました。」等の、「感じた事、思った事」が一番多く32回答あった。「日本とバンングラデシュの国旗が似ていることが分かった。」「葉がよくできた。」等の、「わかった事・できた事」は14回答であり、「バンングラデシュの人は休みの日に何をしているのだろうか?」、「バンングラデシュの大人の人の生活についても知りたい。」等の、「興味・関心・疑問」は12回答であった(表2)。

続いて、③「ほかの国についても知りたいですか?」については、「はい」が32人、「いいえ」が1人と、97%の児童が他の国についても知りたいと興味を持ったことがわかった。

表3：どんな国について、なにを知りたいですか(一覧)(④)

児童	国	知りたい事
1	中国	服装・食べ方・文字
	韓国	
2	インド	食べ物
3	エジプト	エリア55
	アメリカ	
4	インド	ゾウ
5	フランス	パン
6	アメリカ	人口・国旗の意味
7	韓国	人口
	中国	
	中国	人口・年中行事・服装
	アメリカ	
インド		
8	アメリカ	メジャーリーグ・ニューヨークタイムズ
9	アメリカ	文字
10	バンングラデシュ	年中行事
11	色々な国	年中行事
12	ドイツ	クリケット
13	色々な国	同盟・契約
14	オーストラリア	暮らし
	エジプト	食べ物
	サウジアラビア	
	タンザニア	

15	中国		
	ロシア		
	アメリカ		
	アフリカ		
	インド		
	ブラジル		
	エジプト		
	イギリス		
	タイ		
	カナダ		
	ドイツ		
	フランス		
	パプアニューギニア		
	中国		年中行事
	バンングラデシュ		
17	アフリカ		
	フィリピン		
	アメリカ		
	イギリス		
	タイ		
	ブラジル		
	インド		
	フランス		
	イタリア		
	中国		
	韓国		

18	色々な国	困っている事・文化
19	アメリカ	年中行事
20	なし	
21	エジプト	エリア51
	フランス	
	アメリカ	
22	日本	歴史
23	アメリカ	KKK
24	タイ	国旗
25	中国	スポーツ
26	モンゴル	食べ物
27	ケニア	文字
28	モンゴル	伝統文化
インド		
29	ブラジル	年中行事
30	アメリカ	文化
	タイ	
	ブラジル	
	カナダ	
	ドイツ	
	フランス	
	インド	
エジプト	歴史	
32	パプアニューギニア	有名なもの

最後に、④「どんな国について、何を知らたいですか」については、複数の国を挙げた児童は14人であった。表3のように、アンケート結果では多様な回答があったため、以下、地域、国別に分類して示す。地域別にみると、アジア(22人)、ヨーロッパ(14人)、北アメリカ(13人)、アフリカ(9人)、南アメリカ(4人)、オセアニア(3人)と広範囲にわたった(表4)。国別にみると、アメリカ(11人)、中国(7人)、インド(6人)の順になった。

また、知りたいこととしては、「年中行事(6人)」、「食(5人)」、「文字(3人)」、「人口(3人)」、「文化(3人)」、「スポーツ(3人)」、「有名な物(2人)」、「服(2人)」、「歴史(2人)」、「国旗(2人)」、「エリア51.55(2人)」、「その他(6人)」のように多岐にわたった。とりわけ年中行事や食べ物に関心が向いていることがわかった(表5)。

表4：どんな国について知りたいですか(地域別)

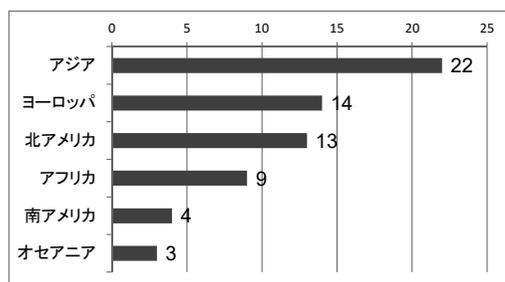
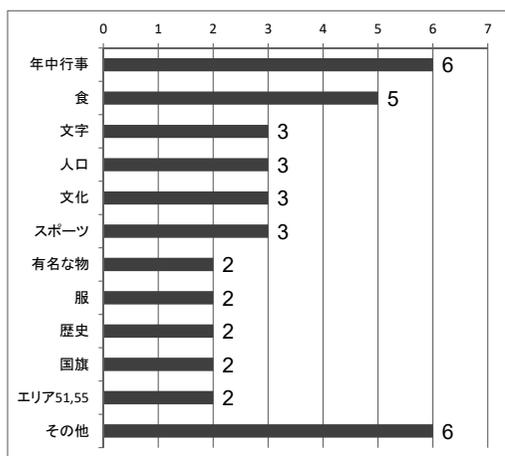


表5：表4であげた国のなにを知りたいですか



(3) 3か月後アンケートと回答結果

3か月後アンケートは、2月に学級担任が行った。回答者数は1人欠席だったため34人である。質問は以下の3問である。

- ①外国に興味・関心がありますか？
(とてもある・少しある・ほとんどない・全くない)
- ②11月の「〇〇まつり」の思い出を2つ教えてください。
- ③授業の後、何か他の国について調べましたか？(はい・いいえ)

調べた人はどんな国の何を調べたのかを書いてください。

アンケートの結果は、①については、とてもある(4人)、少しある(22人)、ほとんどない(5人)、全くない(3人)であった。興味関心がとてもある・少しあると答えた児童は26人と全体の約77%であった。事前アンケートとほぼ同様な結果となった。

②については、バザー(21人)、栞づくり(15人)、レブチャの試飲(13人)、座学の授業(9人)、コマづくり(7人)、その他(8人)であった。授業よりも、PTA主催のバザーが多かったが、栞づくりなど授業に関わるものも児童の思い出として十分残っていると捉えられる。

③については、授業後、実際に他の国について調べた児童は5人であり、調べた国と内容は、「チリ大地震の際の福祉ボランティアについて」、「韓国について」、「フランスで作られた展示について」、「イギリスの童話について」、「フランスのエッフェル塔について」であった。

授業後の事後アンケートでは、ほかの国についても知りたいと思うと答えた児童は全体の97%であったが、実際に調べた児童は12%であった。また、事後アンケートでは、年中行事や食に関することを知りたいと答えた児童が多かったものの、実際にそれらを調べたと書いた児童はいなかった。

3-3. アンケート調査の検討

事後アンケートでは、座学による授業内容についての感想が多かったのに対して、3か月後

アンケートでは、葉づくりやレブチャの試飲を思い出としてあげる児童が多かったことから、講義だけでなく、体験的要素を組み込むことで児童の記憶に残りやすい授業になることを指摘することができる。このような指摘は、先行研究においてもなされており、岡本ら（2017）の実践においても、言葉に比重を置いた事例よりも、体験を伴う事例の方が、その後の子どもの行動に変化を与えることが確認されている。また、体験的要素として、本実践においては、3つの活動①バン格拉デシュの布を使った葉づくり、②折り紙でのコマづくり、③レブチャの試飲、があったが、このうち児童が思い出としてあげたものは、①、③、②の順であったことから、普段の生活の中であまり触れることがないものに触れることが、より記憶に残るのではないかと推察される。

児童の外国への興味関心の変容を見ると、事前アンケートでは、外国に興味があると答えた児童が25人であったのに対して、事後アンケートでは、ほかの国についても知りたいと32人が回答している。しかし、3か月後になると、外国への興味関心がとてもある、少しあると答えた児童は26人と、事前アンケートの際とほぼ同じ人数になっていた（表6）。また、前述したように事後アンケートの際に、ほかの国についても知りたいと答えた児童が97%であったのに対して、実際に調べた児童が12%であった。外部講師が関わることによって、一時的に外国への興味関心が高まるが、その後の学校生活の中で国際理解教育に関わるものがなくなると、興味関心が薄れてしまうと推察される。児童にとっては興味関心を持ち続けることは難しく、国際理解教育を単発的に実施するのではなく、

継続的に行うことが重要になると思われる。

4. 授業協力者の自己評価の検討

授業協力者4人が、K小学校での授業実践を通してどのような課題を持ったのかを、授業後の自己評価をもとに検討する。

授業協力者4名の実践後の感想と見出した課題は、以下の通りである。

○外部講師A

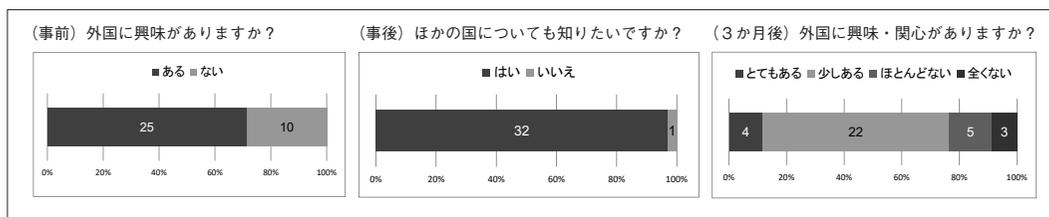
【感想】

自分の生活とバン格拉デシュの小学生の生活を比べてみている児童が多く見られた。児童にとって、実際に海外の現場を見てきた人の視点で座学で聞くことよりも、自分自身の生活とバングラデシュの同年代の子どもの生活を比較する行為を能動的に行うことで、よりバングラデシュの子ども像を身近に感じることができるのではないかと思った。

【課題】

授業の中で、葉に使った布についての説明が、時間の関係もあったため、「バングラデシュの人が作った布です。」という簡単なものとなってしまった。もし、今後このような機会があれば、バングラデシュの人が実際に布を織っている様子を動画で流したり、フェアトレードで作った布は、普通の工場で作られた布とどのような違いがあるのかなども授業で触れることで、葉づくりへの意味づけができるのではないかと感じた。

表6：児童の外国への興味関心の変容



○外部講師補助者B（主に葉づくり担当）

【感想】

講義では、バングラデシュのさまざまな情報や映像により子ども達の興味関心が高まっていったように感じた。

活動では、ほとんどの児童が一生懸命にベンガル語を書こうとしている姿が見られた。他国の文字文化に触れるよい機会になったのではないかと思う。

【課題】

活動では、時間がかかる児童と時間が余る児童の開きが大きく、予想以上に時間がとられてしまった。葉1つを作るのに全力を尽くすのもよかったのかもしれない。活動量や内容を、もう少し検討すべきだったと感じた。

○外部講師補助者C（主に座学担当）

【感想】

子どもたちは受け身ではなく積極的に思ったことを発言しており、活気溢れる授業になったのでよかった。

授業の中で行ったクイズでは全員が参加してくれ、子どもたちにとって興味の持てる内容になっていたと思った。

【課題】

時間配分がうまくいかず、予定していたすべてのことができなかった。

葉づくりでは興味がある子どもとそうでない子どもがおり、可能であれば葉づくりと何かもう1つプログラムを用意して子どもに選択肢を与えられたら選ぶ楽しさもあり、より多くの子どもたちが楽しめたかもしれない。

○外部講師補助者D（主に座学担当）

【感想】

予想以上に教室の雰囲気が和気藹々としていて、終始よいムードで授業をすることができた。

全体の雰囲気も非常によく、楽しく取り組むことができた。

【課題】

授業では、何人かの児童だけではなく、なるべく全員が発言できるようにしたい。

現地の人も連れてきて授業をすると、児童た

ちはより国際理解に興味を示してくれるのではないかと思った。

3名の外部講師補助者が、共通して課題としてあげていた点は、授業の時間配分や児童の反応等、主に本時の授業に関することである。葉づくりやコマづくりなどの体験的な活動の時間では、児童の作成に要する個人差が大きかった。想定していたよりも作業には時間が必要であったことなど、時間のマネジメントが課題として浮かび上がった。

また、外部講師補助者Dがあげていたように、日本人外部講師だけでなく、現地の人と一緒に授業を行うことで、より児童が国際理解に興味関心を示すようになるのではないかという指摘は、先行研究でも明らかにされており、こうした視点は重要であると考えられる。

感想文の中にはないが、外部講師補助者Bの授業後のミーティングでのコメントで、実際に現地を見てきた人にしか話せない内容があること、実際に現場経験があることによってこそ、自信をもって国際理解教育に当たることができるのではないか、というものがあつた。この点は、確かに自分が経験したことをもとにして授業を行うことで、現地をより詳細に伝えることができると考えられる。しかし、実際に現地経験のある者の目線で語られる現地の様子が、児童が得ることのできるすべての情報になってしまうことについては、幾分か不安な点が残る。現場経験のある外部講師は、自分が見てきた現地像を児童生徒に伝える前に、客観的に見つめ直す必要があるのではないかと思われる。

また、外部講師Aの振り返りにあるように、1回の授業時間で扱える内容には限度があろう。連携・協働による実践を複数回積み重ねることによってこそ、児童生徒の国際理解の素地を育むことができると思われる。

5. おわりに

本研究では、実際に授業協力を行うとともに、児童への3回のアンケート調査を実施し、

さらに授業協力者の自己評価をとりつつ、国際理解教育の実践におけるポイント及び外部講師の役割と課題について検討した。

現在、「国際理解」の文脈において、学校現場や市民活動の場から外部講師が求められることは多い。そしてそこでは、外部講師は座学や講演というかたちで話しをすることが多い。例えば、外部講師が学校現場に招待された際の多くは、体育館やホールなどでのプレゼンテーションによる講演が主となっている。国際理解への興味関心が高い児童生徒にとっては、こうした方法（体験談や実践の報告）でもよいとも言えるが、そうではない児童生徒が多い場合、また興味関心がある児童生徒においても、体験活動を組み込んだ教育実践を構想することで、より深い学びへと誘うことができるのではなかろうか。

今後ますますグローバル化が進む現代社会において、国際理解教育への期待は膨らむ。児童生徒が自分自身で体験すること、可能な限り外部講師をも交えた複数回の実践を構想すること、そしてなにより、本稿で示したような「葉づくりにおいて自分の名前やプレゼントしたい相手の名前はベンガル語で書く」というような本質的な指導があってこそ、児童生徒の学びは、オーセンティックな学びとなっていくのではなかろうか。

今後の課題として、アンケート内容や実施方法をより精査し、また学校現場からのアンケート調査も行い、国際理解教育実践に係る実践研究を深めていきたい。

【謝辞】

本研究に際し、授業協力を行うことを許可していただいたK小学校の皆様がこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会（2016）「答申、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- 市瀬智紀（2009）「国際理解教育と持続発展教育の地

域における展開に関する一考察」『宮城教育大学紀要』44, 265-276

伊藤静香（2011）「『日本型』国際理解教育の生成：ユネスコ加盟期から新学習指導要領を通して」『上智大学教育学論集』45, 67-80

伊藤ゆかり（2016）「留学生による国際理解教育活動支援の考察—地域の学生と共に学びあう課外活動—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集』20, 25-34

小島文英・石井由理（2005）「外部講師の視点から見た小学校における国際理解教育」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』20, 47-63

岡本弘子・星野百合子・加藤恭子・木下優子・住友夏代（2017）「JICAボランティア経験者による国際理解教育の取り組み」『子ども学研究論集』9, 15-30

佐藤郡衛（2001）『国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり—』明石書店

杉村美佳（2017）「神奈川県西部の小中学校における国際理解教育の実践の変化—教師に対するアンケート調査の分析を中心に—」『上智大学短期大学部紀要』38, 1-14

植木節子（2013）「国際理解教育の影響と国際感覚育成に関する考察」『千葉大学教育学部研究紀要』61, 193-201

植木節子・高橋博代（2010）「国際理解教育のための自分化認識を育てる授業」『千葉大学教育学部研究紀要』58, 95-102